

神道六教派特立百三十年記念事業 公開シンポジウム

「二十一世紀の教派神道―百三十年を踏みしめて―」

基調講演

二十一世紀の教派神道

講師

井上順孝

國學院大學神道文化学部教授

日本文化研究所所長

平成二十四年六月五日（火）

於 國學院大學 常磐松ホール

【黙祷】

司会 本日はお忙しい中、ご来場いただき誠に有難うございます。

開会に先立ちまして、世界平和と東日本大震災及び紀伊半島大水害よりの早期復興を祈念し、また、お亡くなりになられた方々の御霊を追悼して、黙祷を致します。

おそれいたしますが、ご起立願います。

黙祷

黙祷を終わります。ご着席くださいませ。

【開会】

司会 只今より「神道六教派特立百三十年記念事業 公開シンポジウム 二十一世紀の教派神道―百三十年を踏みしめて―」を開催致します。

私は、本日司会をつとめさせていただきます本記念事業事務局の長村でございます。よろしく願います。

なお、撮影に关しましては、プレス及び記録のみとさせていただきます。個人での撮影・録音などはご遠慮くださいますよう、お願い申し上げます。

【挨拶】

司会 出雲大社教、神道扶桑教、實行教、神道大成教、神習教、御嶽教の神道六教派は明治十五年五月に特立を受けまして、今年、特立百三十年の記念すべき年を迎えました。

今から百三十年前と申しますと明治の初期でございますが、時代の変革期にあつて、当初、明治政府は教導職を制定し、神官、僧侶などの合同布教により、民心の安定を図ろうとしました。

しかし、明治政府の方針転換などによりまして、教導職は廃止されることとなり、また神社非宗教論による「神官教導職分離令」により、神社の神官による布教が禁じられたため、布教の道を選ぶか、神社の神官として祭祀専一の道を選ぶか選択を余儀なくされました。

それぞれの教派の開祖は、自らの信ずる道こそが世を救い人を助ける道であるとの信念から、当時は神宮教を含む七教派が、明治十五年五月に別派特立し、布教の道へと歩み出しました。

昨今の我が国の世相をみますと百三十年前と同様に問題点が多く、昨年の東日本大震災による自然災害や原発事故の問題、高齢化、少子化問題、教育崩壊問題など無視できない状況にあります。

この特立百三十年という節目にあたり「二十一世紀の教派神道」と題し、國學院大學井上順孝教授を講師・コーディネーターとしてお迎えし、芳村正徳神習教教主、村島邦夫御嶽教管長のお二方をパネリストとして、教派神道の百三十年の歩み、人生儀礼に見る信仰の絆、自然の脅威と癒しなどをテーマに語り合っていただけ、教派神道の未来に向けてのご提言をお聴かせいただければと存じます。

【基調講演】……………國學院大學神道文化学部 井上順孝 教授

司会 まず、國學院大學神道文化学部 井上順孝教授に「二十一世紀の教派神道」と題して、基調講演をいただきます。

井上先生のご専門は宗教社会学でございます。近代の宗教運動の比較研究、教派神道の研究などをなさっております。また、先生は平成十年より、宗教情報リサーチセンター長、平成十八年からは、本記念事業に共催をいただいております 國學院大學研究開発推進機構 日本文化研究所所長を兼任なさっております。

プロフィールの詳細はレジメのご紹介文をご覧くださいまして、時間もございませんので基調講演に入らせていただきます。

井上先生、よろしくお願いいたします。

井上 こんにちは。百三十周年の節目にこういう役割を与えられまして、どのようなことを話したらいいのか考えました。これまでの教派神道の歩みをたどりつつ、こんにちは抱え

ている課題について話したいと思います。教派神道は、ある意味政治的な動きの中に生まれた部分もありますけれども、他方では日本の近代の宗教史の中での一つの重要なポジションも占めてきました。それを再確認するとともに、今直面している問題を見ていきたいと思えます。

なぜ、私がこういうところでお話しすることになったか。簡単に個人的なことも紹介させていただきます。卒論というほどではないのですが、私が大学卒業のときに選びましたテーマが明治の宗教史でありました。当時、東大におられた堀一郎先生の指導のもとで、そういう研究をしておりました。堀先生は柳田国男の娘婿でもあられ、民間信仰にも関心をもっておられました。

大学院に進み、修士論文では平田篤胤の研究をいたしました。博士課程の途中で東大文学部の助手となり、助手を数年務めたのちに、國學院大學に移りました。日本文化研究所にお世話になることになったのですけれども、そこで現在は國學院大學研究開発推進機構の機構長をされている阪本是丸さんと知り合いました。一緒に近代の神道の研究をやる機会を得ました。たまたまでしたが、社寺取調類纂という明治期の文書を読む機会に恵まれ、明治期以降のことをもっとやろうということで、教派神道の研究にも入りました。

博士論文も「教派神道の形成」がテーマであり、まさに教派神道を焦点とした研究でした。それ以来教派の方とはいろいろなかたちでお付き合いし、お世話になりましたので、こんにちこういう役割を与えられることになったかと思っております。

本日の話の概要は、レジュメに書いてあります、本当に目次だけで申し訳ないのですけれども、それに沿ってお話したいと思えます。

教派神道と一口に言っておりますが、この他、神道教派や宗派神道など、いろいろな言い方があります。ただその違いを説明したりしておりますと大変時間がかかりますので、今日は教派神道ということできずと通させていただきます。

本日の講演では、日本の近代の宗教の流れを考え、理解することを一つのポイントにしたいと思えます。もう一つのポイントは、宗教というものも、当然ながら全体社会の大きな変化、流れの中で展開するものですから、それがどのような影響を与えたのか、社会全体の大きな変化が教派神道の在り方、形成から始まってこんにちに至るまでどのような影響を与えたのかという、大きく二つの視点から見ていきたいと思っております。

宗教史の流れという観点から言いますと、この教派神道の形成は近代における、いわゆる神道的な文化伝統の再編成というものの中で生じた一つの出来事と、私はとらえております。近代日本というのは非常に大きな変化を迎えたわけで、それまでの伝統的な宗教の要素も組み替えが起りました。その一つであります。そうしますと、こんにちでいう神社神道、あるいは神道系新宗教と呼ばれているものとの関係が非常に重要になります。今回は、その二つについては割愛させていただきますが、そうした流れの一つというところをえ方をしているということだけは、述べておきたいと思えます。

近代社会ができませんときには、非常に大きな政治的、経済的な変化が起りました。中でも明治政府の宗教政策、これは教派神道の形成に当たっては決定的な役割を果たしました。同時に近代国家の形成には教育が重要です。日本は非常に教育が進んでいた国でありまして、近世から世界的に見てもトップレベルの教育を大衆的にやっていました。明治に入り、西洋の教育制度を見ながら、すぐさま近代的な教育制度を整えてまいります。そうしたものの関係とも教派神道はあるわけで、この教育の面についても私は宗教教育というテーマで長く調査をやっています。本当は大事なテーマですが、これも今日は割愛させていただきます。ただ、教育というテーマが教派神道の形成にあたって、非常に重要であつたということは指摘しておきたいと思います。

神道教派が「教」として形成された背景について、触れたいと思います。明治の宗教史をやりますと、先ほど言った神道の伝統の流れの再編成が非常に注目すべき出来事であることが分かります。それを大きくまとめますと、祭・教・学への分化と言えます。「祭」は祭祀、お祭りごと。基本的には神社神道がそれを担うことになったものです。「教」は教化でありまして、これが教派神道の主たる課題になっています。「学」というのは学問でありまして、國學院大學の前身である皇典講究所などが、それを担います。明治十五年に教派神道の多くが特立したのと同じ年に、皇典講究所もできております。この二つは非常に密接に関連した出来事であります。この分化、分かれていくということは、宗教史的に必然的であつたわけではありません。いわば流れの中でそうせざるをなかつた、あるいはそういう道を選んだと理解したほうがいいと思います。

そのことを少し申したいと思います。宗教史の流れから理解しようと思しますと、江戸時代から明治にかけてどのような神道的な宗教の流れ、動き、思想的展開があつたかを整理する必要があると思います。簡単に要点を申しますと、これは國學院の國學という言葉に示されますように、江戸後期に國學が広まりまして、これは神道的なものを日本文化の中心に据えようとする明治以降の動きをプッシュする要因になりました。

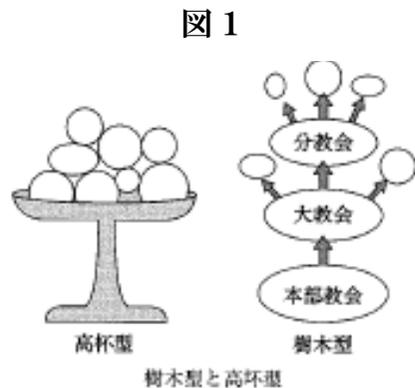
富士信仰や御嶽信仰というものがありますが、山岳信仰が、近世にも盛んになりました。山岳信仰がなぜ大事かと言いますと、ただ山を遠くからあがめるというだけではなく、講をつくりまして、それぞれの地域の人が実際に山に登るための組織をつくっていくわけです。つまり、小さな組織とそれを統括する組織というネットワークが出てくる。これは教团的な神道の、準備体的な機能を持つたと考えております。

伊勢とか出雲には、御師と呼ばれるような人たちがおり、それぞれ参詣講を組織しておりました。こういう人たちもそれなりの神社と地域の人たちをつなぐネットワークをつくっておりまして。江戸時代という自由な行き来が難しいと言われていますが、その中で宗教的な理念に基づいた人々の動きや集まりの萌芽形態ができました。それほどはきっちりしていないけれども、緩やかなまとまり方、連絡のつけ方を各地にできていました。このことが、大変大事であります。

一方、黒住教、天理教、金光教という、こんにちでは神道系新宗教と言われることが多

いのですが、一人の教祖が説いた教えを中心に、その教えを広めるためにいろいろな組織ができていくという形態も、十九世紀には既にできています。これが、幕末から明治初期にかけて、非常に大きくなっていくことが見られます。

こういう神道的な教えや活動の分化の流れは幕末にはいろいろな要素があつて、何か次の段階のものに展開するといったことが起こっても、少しもおかしくなかったと言えると思います。つまり、神道が教団として展開する条件が相互にゆるやかに関連しながら芽生えていたということをお願いしたいわけです。ただ、そこには組織論的に見ますと二つのパターンができてまして、これが図1にあるようなモデルで、私が勝手につけた名前ですけれども、高坏型と樹木型です。



樹木型の方が、分かりやすいのですが、神道系新宗教は、大体こういう組織のモデルになります。樹木型は根っこが一つで、教祖が説いた教えが各地に広がって、支部教会、分教会が出てくる。しかし、あくまで教祖につながるということです。教義や儀礼、社会的実践の目標を考えると、常に根っこに帰る、われわれは何のためにこういうものをしているのかを帰るという特質を持っております。

それに対して、高坏モデルは一つの大きな杯があつて、そこに多少違ってても似たようなものが一緒に入ってきて、何となくまとまるといふ構図であります。これは日本の神道的な思想や運動を考える上で、非常に重要なモデルになるのではと最近思っております。最初この概念を提起したときは、教派神道のいくぶん寄せ集めの組織と、新宗教的な組織を区別するためにこういうモデルを出したのですが、これはもっと広く適用できるかもしれないと考えるようになりました。これは後で申します。

ともかく、当時は、それまでのいろいろな運動が展開、あるいは教派ができるような条件はあつたわけです。つまり、何か異質なものが突然起こつたわけではないのです。では、その展開に何が介在したか。一つは、明治の宗教政策が及ぼした影響であります。これが「祭」と「教」の分離であります。つまり、まつりごとと教化を分ける。神官教導職の分離が明治十五年、一八八二年一月に決まります。しかし、これをよく考えてみますと、一般的に宗教心においてこれは全然必然性がないのです。おまつりをやることと、教化することを分けるというのは、普通宗教ではあり得ないのです。どの宗教も儀礼があり、それに伴う教えがあるわけですね。教えがあるから、それに伴う儀礼がある。もっと古くいえば神話と儀礼のような関係もそこに入りますけれども、必ず相補うもの、あるいは相互に密接に関係するものであるはずですよ。

しかし、これが分けられたのは、当然明治政府が信教の自由を日本は実現しているという建前と、しかし神社を別格にしておきたいという意図が合わさつてできた論理です。つまり神社は祭祀だから、信教自由というときの宗教のカテゴリーには入らない、特別なも

ります。後で本日の祝賀会の会場となります若木タワー十八階の有栖川宮記念ホールは、このときの初代の総裁有栖川宮熾仁親王を記念するホールです。それが同じ明治十五年十一月四日ということで、明治十五年は一八八二年ですから、今から百三十年前は神道界にとっては非常に重要な出来事が起こった年となります。

この辺はいろいろ研究がありますし、特に皇典講究所に関しては校史・学術資産研究センターの報告書に、機構の齊藤智朗さんが論文を書いておられますので、それを読むと詳しく経緯がわかります。このとき、両方に非常に影響力があったのは扶桑教の宍野半です。教法家として頑張るとともに、皇典講究所の設立にもかかわっております。宍野半は出身が薩摩隈之城で、今は薩摩川内市になっています。実は私が高校まで住んでいたところですので、いろいろなところにつながりがあるものだと思っております。

「教」と「学」が役割分化をすることになったのが、明治十五年でした。皇典講究所は國學院の問題ですので、これも割愛しまして、教派がどうなったかということを確認しておきます。一八八二年、明治十五年に六派ができ、少し遅れて御嶽派が大成教から分かれて七つ。そのうちの神宮教は後に財団法人になりますので、今日の会では主催者には含まれていません。教派神道成立の関係図を示しておきましたが、この図を見ても、明治十五年がいかに教派にとって画期的な年であったかが分かります。

しかし、それ以前にも既に一派をなしていたものがあります。それがここにありますように黒住教と神道修成派です。神道本局というのは神道事務局を継承していますので、これもそれ以前に芽生えていたということが出来ます。

その後も幾つか、つまり御禊教、神理教、金光教、天理教ができ、最終的には十三派で神道十三派という言い方ができるようになったわけです。ちなみに、仏教も江戸時代に黄檗宗が江戸初期にできまして十三宗になりました。基本的には、こんにちに至るまで仏教は十三で、日本の宗教史は十三という数字と非常に深いかわりがありますが、これは偶然です。

明治十五年にできた派の基本的性格は、私の分類から申しますとほとんどが高坏型です。一つは、先ほど申しました何となく寄り合い所帯ですね。もともと同じ教祖であるからその理念を共有して、教えを広げていくよりは、それぞれあった講とか教会が一つの派に組み込まれていくかたちで形成された場合が多いので、寄り合い所帯的な面が非常に強い。

ただ、高坏型が持つもう一つの面を私はこのごろ注目しております。つまり、神道はこうしたかたちの組織化にあまり抵抗がないということです。自分たちが所属している教派なり団体の境界線がかなり伸縮性がある、緩やかであるということ。したがって比較的簡単に小さな組織が全体から出ていくし、入ってもくる。それに関して、いちいち「あれは異端である」「これを入れることはどうだろうか」という議論をしたりしない。時々問題になる場合もありますけれども、おおむねそういうものであるということでは対処している。この辺が、世界宗教や新宗教における組織形態と比較してみると、ちよつと性格が違ふということが分かります。その意味で、日本における神道的な教団の形成とその組織的特徴

を考える上ではなかなか面白い視点になるのではと思っております。

さて、こうした中でできた教派も二十世紀に入り、第二次大戦後にとっても大きな変化を受けることとなります。戦後に起こった社会変化と教派神道との関係について述べます。実は二十世紀に入ってから日本の宗教史は新たな展開をしていました。宗教の自由競争は、相当進行していたのです。宗教の自由競争は戦後に起こったことのように思っている人もいますが、宗教の変革は法律が一つ変わったからといって急に変わるものではないんです。基本的な構造変化は、その前から起こっていたのです。

明治時代の神社神道は国家的に保護を受けましたから、近代神祇制度と呼ばれるものが定着しました。ただし、神社神道は宗教でないと言われていたために、人々に対する布教化に関しては、逆に手足を縛っていたようなところがあります。教育上も、儀礼面は別として、教えの面ではあまり関わることできない状況にありました。こうした中に、樹木型の神道教派は組織をどんどん拡大していきます。ところが高坏型のものも二十世紀に入ってから次第に信者数も減るところが増えます。全体として、あまり広まらなくなります。

当時の仏教宗派の状況について少し触れますと、江戸時代に確立した檀家制度は明治政府の方針で廃止されます。つまり、ある家に生まれたら、その家の宗旨を継承し、自分の意思では変えることができなくなるというようなことはなくなりました。宗旨を変えることも離檀することもできるようになった。しかし、これも法律が変わったからといってすぐに社会がそうなるわけではないのです。檀家制度は実質上その後も続いていると言えます。それまでの寺院と檀家との関係は基本的に維持されます。そのことが関係していると考えられますが、新しい社会状況を考慮に入れた布教や教化に力を入れるという姿勢がそれほど強くはみられなかったのです。神社にしても、仏教宗派にしても江戸時代から続いていた伝統的な宗教の場合、人々に教えを伝えるための工夫をいろいろと考えなくても、一定の数の人が参詣に訪れたり、一定程度の固定的なつながりが維持されていたということになります。

ところが、新しくできた教団やキリスト教は、布教する上では非常に厳しい状況にありましたから、いろいろ工夫をせざるを得なかったのです。キリスト教の場合は教育に非常に力を入れました。こんにち宗教系の学校は小学校から大学まで約九百あります。そのうち、大体三分の二がキリスト教系です。教育という場を通して、いろいろな思想的な影響を与えるという道を選んで、それなりの努力をします。

新宗教についてみると、神道系新宗教、仏教系新宗教と呼ばれる教団が次々と設立されるようになりました。昭和前期にはそれがかなりの数にのぼります。霊友会などは戦前においても、けっこう大きな勢力になりました。そういうようなことが、既に戦前に起こっていたわけです。そうした土台の上に戦後の新しい状況が到来するわけです。ご承知のように政教分離と信教自由が宗教界を包む大前提となります。そして宗教法人を新しく設立することが容易となります。

このことが、教派神道にとっては大きな影響をもたらします。簡単に言いますと、神道教派と神社神道との法的な差、それから教派神道とそれまでは教団として公認されていなかった新宗教との法的な差もなくなったということです。すべて宗教法人法によって登記が認証され、活動に関する法的条件も同じになったということです。

そして、戦前は公認された教派の一教会として活動していたような団体が独立した宗教法人として次々と認められていきます。たとえば、戦前は御嶽教、神道大教といった高坏型の教派に所属していたような比較的小規模の教会が、一つの独立した宗教法人として活動することが可能になったので、その道を選びました。これによって、教派神道側は傘下の教会数や信者数が減少することになります。

これは、法律がもたらした変化です。法律がもたらした変化は、高坏のしほりを弱めたということですが、従って、あまり高坏の中に収まりたくなかったものは、そこからどんどん出て独立してしまつたと理解していただければいいと思います。

戦後の宗教の「自由競争」ということについて言えば、法制度をはじめとする社会的条件がそれを促進したということになります。法的なものでいえば、宗教団体法から宗教法人令、宗教法人法と展開しました。宗教法人令というのは終戦の年に公布されていますし、現在の宗教法人法は一九五一年、昭和二十六年に公布です。以後、それがこんにちに至る法的なくりになっております。宗教法人は「宗教は、それぞれ自由競争してよろしいですよ」という趣旨になっています。「国がある宗教だけを特別扱いすることはしません」という原則が出されました。むろん、法を犯せば話は別ですが、国に掲げる目標に合わないから認めません」ということは言わなくなりしました。

政教分離と信教自由のもとでの自由競争は、教派神道にとっては勢力を非常にそがれたという結果をもたらしました。戦前は教派神道ということでもくりが意味をもっていました。そういうくりも戦後は必要なくなりました。むろん歴史的な展開を述べる場合は大事ですが、実際に宗教活動をしていく上では、教派神道であるかどうか、何も違いをもたらさないということですが。

そうすると、教派神道はいかなるアイデンティティーをもつべきかが大きな問題となつてきます。文化庁宗務課で出している「宗教年鑑」には、神道系の中に教派神道系という小区分がありますが、これはあくまで歴史的な経緯が分かるようにということであって、現在の法的な扱いに実質的に何か区別があるわけではありません。

こうした変化をどのように認識するかは、当事者の方が難しかったのかもしれない。時間がかかったようです。さすがに、今はこうした変化が生じたことを理解されていない方はいらつしやらないと思います。けれども、制度が変わったことの本質が何かであるかを十分考えるということもなかなかなされていかないかもしれません。従来の方でいいのだという選択肢が非常に魅力的に見えたりしたのだと思います。ただ世代間でも受け止め方がずいぶん違うようですので、教派神道においても、世代交代によって、戦後社会の現実に対する新しい認識が自然にできているのではないかと思っています。

さて、二十一世紀となりますと、事態はより深刻になってきます。まさに、今われわれの社会、われわれの文化が課題としていること、あるいは日本の宗教が抱えている問題と教派神道はどう向かい合うのか。こういう問いから逃れるわけにはいかなくなります。これまでの歴史をきちんと踏まえることは非常に重要なことです。教派神道がどのような社会的条件、文化的条件のもとで形成されたかを認識しておくことは、大前提となります。しかし、これまでのやり方の踏襲だけでいいのか、新しいやり方を導入すべきではないか、といった検討がどうしても必要になります。

現代社会はいろいろな問題を抱えております。恐らく教派神道にとってこれらの問題に對して包括的に対処するということは無理だと思います。自分たちが今まで大事にしてきたこと、あるいは自分たちが本来対処してきたことを、現代社会でどのような形で活かせるのかという考え方が、一番自然なのではなからうかと、端から見ていると、そのように感じられるわけです。

では具体的にどのような事柄が教派神道の歴史の中で重視されてきたのでしょうか。一つは、「自然との向かい合い」という課題です。神道にとって、自然というのは古代からずっと大きなテーマです。自然とどう向かい合うか。一方では自然は恵みを与えてくれますけれども、他方では大いなる脅威となることもあります。この二つの側面は、恐らく今後も変わらない。それを強く感じながら生きるといのが、神道の一つの特徴であろうと思います。

これは、近代化への反省を伴う考え方とも通じます。近代化への反省の一つは、近代文明というもののパワーに目を奪われて、自然が持っていたとてつもない力をつい軽く見てしまったということです。自然破壊や産業優先一辺倒の近代化路線が、ときに自然からの痛烈なしっぺ返しをくらっているのは、つい最近も目にしたばかりです。このような形の反省というのは、神道的な立場に限らず、現代社会ではかなり広くシェアされるようになってきております。そうしますと、自然との向かい合いを、教派神道なりに考えるというのはひとつのポイントになると考えられます。

この自然への注目、実は社会全体でも面白い形であらわれています。これは必ずしも教団人にとっては諸手をあげて賛成とはいかない面もあるかもしれませんが、最近、山ガールとかパワースポットという事が話題になっています。山や神秘的な場所への関心が高まり、山に登る人、とくに女性が増えています。またパワースポット巡りをする人も、これまで女性が多いようです。自然の力へのあこがれとか期待というようなものも見られます。ところが、この場合には、しばしば仲介する宗教家や教団をすり抜けているという傾向がみられます。個々人か、直接そこで自然やパワーに向かい合えばいいという傾向が強くあらわれていることです。

私自身はそれでもかまわないと思っています。自然という対象に直接一人ひとりが向かい合って、自分なりの何かをつかみたいという気持ちは大切ですし、それがより多くの人

に広がっているのだと思います。書店に行きますと、神道や仏教など伝統的な宗教に関する書籍は増えています。それらを読みながら各地の神社やお寺に行くという方も多いわけですね。ただし、それは宗教家とか、個々の教派が介在することを、むしろ拒否するような面もあるわけですね。そのことは踏まえておかなければなりません。現実の社会がそうなってきていることを認識したうえで、どうすべきかということですね。この現実を目を背けるとか、それは別の現象だというふうに行っていると、人々との距離が遠くなるでしょう。

当然、教派神道というのは今までの自然へのかかわりでは、山岳宗教にそのモデルの一つがありますし、自然を大切にすることと重視しない派はどこもないと思います。先ほど述べました自然に向かい合うときの二つの側面、すなわち恵みと脅威ということ、そのことに対して、儀礼や教えの場で人々にどう伝えていったらいいのかをあらためて各派が考えるということになるかと思っています。

これは古い問題であり、新しい問題であるとも考えられるわけですね。新しいというのは、単に二十一世紀だからというわけではなく、現代社会の構造自体がもたらした問題だからです。近代化以降の新しい技術革新というのは素晴らしいもので、われわれもその恩恵にあずかっているわけですから、基本的にこれを否定する気は毛頭ありませんし、それはそれでいいと思います。しかし、自然というのは、そうした人間の誇るべき技術があつという間に蹴飛ばすという力をもっています。それを如実に示したのが今回の大震災でしたし、そういうことはいつでも起こり得るわけですね。脅威という面でいえば、それこそ直径十キロの隕石が落ちてきたら、世界は破滅的状况を迎えます。そういうような自然のすごさは、むしろしつかり正面からとらえる。そういうとらえ方の歴史を持っているはずではないか。技術がここに至るまで至っているからこそ、これまでとは違った新しい脅威が生じる可能性がありますし、その意味で、現代の問題としてとらえることが求められるのです。

教派神道が関わってきたもう一つの面に触れたいと思います。冠婚葬祭という言葉がありますけれども、人間が生まれ、育ち、死んでいくというプロセスも、昔から繰り返されてきたことです。学術用語としては、通過儀礼とか人生儀礼という言葉がありますけれども、人生の節目のときにおいて、その人間のいのちの流れを感じるための儀礼はどの文化にもあります。この面に関して、教派神道はどうかかわってきたのか。教派神道は神社神道と違いますが、戦前から神葬祭もできたわけですね。ということは、神道なりの死の解釈を提示することができた。葬儀の場面において、どのように人々に死の意味を説き、そこでの神と人との関係や、あるいはこの世とあの世の関係をどう意味づけていくかという役割をこなうことができる位置にいたわけですね。その意味では、それをもっと前面に出しているのではないかという気がします。

私は、現代社会の特徴を示すキーワードとして、常々「情報化・グローバル化」という言葉を使っています。現代世界には、非常に大きな変化が起こっております。それをあえて「国際化」と言わずに、「グローバル化」というのはなぜかということ最後に申したいと思います。

国際的という場合には、国という枠があることが大前提になっています。「日本とそれ以外の国」といったような区分を常に行います。その上で国と国との関係がどうあるべきかという議論になっていくわけです。ところが、今起こっている宗教の問題も儀礼の問題も、人々が抱えている問題はむしろグローバルになっていっていると言えます。どうしてこういうことを言うかといいますと、先ほど山ガールやパワースポットの話もいたしましたが、一方ではシャーマニズムやアニミズム、マナイズムといったものも多くの国で再評価されています。こうした事柄への関心はグローバルにあらわれているのです。

ヨーロッパの研究者がシャーマンに注目するだけでなく、自分もシャーマンになってしまおうとか―そこまでしなくてもいいと個人的には思うんですが―、そういう例もあります。ヨーロッパの人も今までとは違う形で、神道への関心を抱くようになっていきます。異国趣味ではないのですね。自分の生き方として関心をもつのです。日本の宗教だからというのではなく、たとえば自然を大切に宗教の一つのあり方として、というような関心です。これを日本の宗教が再評価されたというような受け止め方をするのは、国際化の発想です。どうもそうではないのではないかと私は感じています。その背景には、文化ごとに人を区分するというよりも、むしろ人間が具体的な文化の中で立ち向かい、解決しようとしてきたこと、それ自体の中に含まれていた普遍性が、グローバルの時代には、文化を超えて自覚されるようになったのだと思います。

そうになると、私はこの宗派とか教派という枠は枠として、もっと広く考えるというスタイルもあってもいいのではないかと考えます。情報化、グローバル化が進んでいる時代であるからこそ、境界線はもっとフレキシブルにしたほうがいいのではないかと。自分たちとこの派は違うということをあまりにも出していくと、結局自分たちの派だけが救われればいいという独善的な方向に向かう可能性もあります。教派は緩やかです、高坏型です。それは境界線があいまいで、柔軟性に富んでいる。よく言えばそのように解釈できます。私は「よく言えば」という方を見たほうがいいと思います。悪く言っていると、だんだん元気がなくなりまして……。そのフレキシビリティは何かというと、異なった文化や民族など、いろいろなところでの問題も常に自分たちの問題として取り込めるし、「何々教を信じていないから、君たちは仲間じゃない」という発想法にならない。いろいろな文化の人とも手をつなぎやすい構造ととらえたほうがいいのではないかと。

死や自然の問題は、宗教にとつては最も原初的な問題とされているんです。呪術が非常に活躍する場でもあるんです。呪術的な事柄は、かつては近代が乗り越えると考えた人もいるんですが、私自身も今は全くそういうことはできないと思っています。原初的なものこそ、パワーがあるんです。しかし、原初的なものは文化による調停を拒否しますから、非常に危険でもあるわけです。

アメリカの原理主義者の中には、墮胎に強く反対して、「生命が第一に大事である」という主張をして、プロライフと呼ばれる人たちがいます。このプロライフ、生命が大事だという人たちが墮胎をする医師を射殺するという事件がありました。これは非常に分かり

やすいので、例として挙げました。プロライフというのは、ある意味宗教的な理念に基づく、一つの文化的主張です。この教えが正しいというのは理性的な主張ですが、にもかかわらず、自分の敵対者と思われる人を殺すという行動は非常に原始的で、自分の仲間以外は殺すというのは、非常に原始的で、人間は宗教で非常に理性的な存在であるといつても、最後にとつともなく人間の奥の深く、ひよつとしたら百万年ぐらいの歴史を持つような衝動によって、動かされるのかもしれないという怖さがあるわけです。進化心理学などでも、そのような見方をします。

そうした原初的なものは捨て去れるとか、理性で押さえ込めるものではありません。その力をいかにこれを適切に現代社会に発揮させていくのか考えるしかありません。

最後は時間の関係で少し急いでしまい、やや舌足らずな話になってしまいましたが、意を汲んでいただければと思います。グローバル化の時代であるからこそ、人間の原始的な感情の処理は、これからも大きな問題であると思います。つまり時代の変化を意識しつつも、よりベーシックなことに教派の方には力を入れていただきたい。身の回りの生き方についてどうかわれるかということをつねに考えていただくと、二十一世紀の教派神道につながるのかなと考えております。

私なりの教派神道への見解を述べさせていただいたということで、お許しただけければと思います。ご清聴ありがとうございました。

司会 井上先生、貴重なお話をお聴かせいただき有難うございました。どうぞご降壇下さいませ。では、これより十四時十分まで休息とさせていただきます。再開は十四時十分を予定しております。